

加西のふるさと散策 おなきし 女切るまん伝説

上万願寺町

上万願寺から上芥田へ越す峠の坂を「おなきり坂」と呼び、坂の頂上には二つの塚が祀られています。この塚にひめられた悲しい恋の物語をご紹介します。

昔、万願寺に「てる」というたいそう美しく働きの娘が住んでおりました。この村では機織りをするのが女の役目になっておりましたので、てるも毎日機織りに精を出し、何日かに一度やってくる町の糸屋に手渡し、手間賃



▲現在峠には、市兵衛とてるがいつも一緒にいられるように、と願いをこめた塚（比翼塚）が建っています。

を貰っていました。てるの織る布は、たいそう美しくしつかりとしていて、とても評判の良いものでした。

糸屋の若者は名を「市兵衛」と言い、働きの心優しい青年でした。機織りの上手なると働きの市兵衛、いつしか二人は心惹かれるようになっていきました。

しかし、てるには「源四郎」という親の決めた許婚がおりました。許婚があるのだから、市兵衛のことは忘れよう：と毎日一人で思い悩んでおりましたが、忘れようとすればするほど思いは募るばかり。やがて二人は人の目を盗んであいびきをするようになりました。日も西に沈みかけた頃、市兵衛が仕事を終えた頃、二人でしめしあわせて、村はずれの峠でしほの逢瀬を楽しむのでした。しかし、度重なるにつれて両親の知るところとなり、村人の噂に上り、さらには源四郎の耳にも入ってしまったのです。両親はいさめ、源四郎は怒ります。村の人たちも「ふしだらな娘」とさげすみました。どうとうてるは、一人では外へ出られなくなりしました。

反対されると恋の炎はより燃えさかるもの。二人の思いはいよいよ強くなる

なっていました。とうとう二人は、一月八日の「鬼追い」祭りの夜、二人だけで村を離れることを決心したのでした。

いよいよその日、てるは逆る思いを晴れ着に包み、豊作を祈る村人たちにまぎれます。祭りが最高潮に達したころ、てるはそっと人の輪を抜け出し約束の峠までやってきました。しかししてを待つていたのは恋しい市兵衛ではなく、何と源四郎だったので。二人が会う約束をしていることを聞きつけて、待ち伏せしていた源四郎は、人影を市兵衛だとばかり思って、嬉しそうに駆け寄ってくるてるの姿に逆上し、てるが驚いて声を上げる間も与えず切りつけました。てるの晴れ着は真赤に染まります。その時遅く、てるの名を呼びながら市兵衛が峠の坂を登ってきました。しかしそこにあつたのは、見ても無残に息絶えたてるの姿。市兵衛は恋しさのあまり、てるのなきがらを抱きながらそばにあつた池に身を投げました。市兵衛が十八歳、てるは十六歳であつたそうです。

それからというもの、村人たちは二人の死を悼み、この峠を「女切峠」、池を「女切池」と呼ぶようになりました。



そしてこの場所に小さな墓を建てました。二人がいつも一緒にいられるように。恋の物語…

▶ 1月8日の晩に“てる”が眺めていた東光寺の鬼追い。赤鬼が松明、青鬼が矛を持って駆け回ります。青鬼の矛に打たれた人は今年1年いいことがある、と言われていました。